

山路を下りて刈田を横ぎりぬ

高浜虚子

早いもので10月も残すところあと1日。暦は11月に入ります。二十四節気の一つ霜降も過ぎ、朝夕はぐっと冷え込むようになりました。今週は好天に恵まれたので、出張の往復は、運転する車窓から深まる秋の景色を眺めることができました。霊山方面から山々を越え、トンネルをくぐり、相馬福島道路を下ってくると、眼前に相馬の街が見えてきます。さらに進んで稲を刈り取ったあとの田圃を横切り、一路、学校を目指しました。一面に刈株が並ぶ広々とした田圃を眺めると、季節が秋から冬へ向かっていることを実感する今日この頃です。



小林さん読書体験記奨励賞受賞

10月13日、第40回全国高校生読書体験記コンクール福島県選考会が行われ、1年生の小林幸乃さんが奨励賞を受賞しました。県内13校から1,214点の作品が寄せられ、最終選考に残った40編の中から選ばれました。体験記のタイトルは「いつか、変わってしまうから」。辻村深月著『かがみの弧城』を読み、自分が抱いた疑問と戸惑いを、明日への希望に転化させた秀作です。奨励賞受賞おめでとうございます。



おすすめ書籍



池井戸潤著『半沢直樹 アルルカンと道化師』(講談社)

TBSの人気番組『半沢直樹』が終了した直後、妻から借りて一気に読了しました。物語に引き込まれ、先を読まないで居ても立っても居られなくなりました。なぜ池井戸作品はこんなに面白いのか。私には上手く説明できませんが、本書では東京中央銀行大阪西支店を舞台に、半沢が老舗の美術出版社の仙波工芸社を買収工作から救済するため奮闘します。対立する上司や同僚との攻防は手に汗握る面白さがあり、現代アートの世界的な画家仁科譲の作品に隠された秘密に驚かばかりでした。有名な絵に隠された謎を解き明かしていく半沢の姿に一喜一憂。最後まで楽しめること請け合いの一冊です。

荒さん文部科学大臣特別賞受賞

8月に行われた第66回福島県高等学校体育大会代替大会の陸上競技女子5000メートル競歩で第1位に輝いた荒ひかるさんに、8月18日付けで文部科学大臣特別賞が授与され、賞状が届きました。コロナ禍でインターハイは中止となりましたが、この結果は全国大会出場に相当するものです。顕著な成績は賞賛に値します。特別賞受賞おめでとうございます。



本校の校訓について ～至誠の扁額を仰ぎ、文武両道に邁進せよ～

先月の大相撲秋場所で優勝した関脇正代関が、大関に昇進することになりました。メディアの関心が伝達式の口上に集まる中、正代関は「至誠一貫の精神で相撲道に邁進してまいります」と力強く述べました。熊本県出身の大関誕生は実に58年ぶりのことです。地震や豪雨などの災害に見舞われた熊本の方々に、勇気と希望を与える明るいニュースとなりました。口上で使われた「至誠」は、言うまでもなく本校の校訓です。校長通信のタイトル<Sincerity>は、英語で「至誠」を意味します。そこで本校の校訓について、あらためて考えてみたいと思います。

本校は明治31年に福島県第四尋常中学校として開校しましたが、初代校長佐藤慶次は「生徒心得綱領」を制定し教育方針を示しました。その中の一つが「言行至誠ニ基キ俯仰天地ニ愧ヂザランコトヲ期スベシ」の一節でした。この「至誠」の二字こそ、天明・天保の飢饉で窮乏する相馬を救った二宮仕法の教えです。幕末、相馬中村藩は二宮尊徳の御仕法を採用し、質素儉約と備荒貯蓄に努め、農業技術の向上による収量の増大を図り、藩の財政を立て直しました。その事業に一貫する精神的原動力が「至誠」でした。そのため「至誠」は相馬の人たちにとって心の拠り所であり、佐藤はその精神の継承を教育方針としたのです。以後、歴代校長の教育方針は、時代の影響を受けながら幾多の変遷を遂げますが、つねに「至誠」が中心に据えられました。具体的には、明治38年、第四代校長広江万次郎が尊徳翁の教えをより具体化するため、「誠実」「剛毅」「宏大」を校訓としました。大正2年、第七代校長桜井賢三はあらためて「生徒心得綱領」を改定し、その第一に「生徒ハ至誠以テ己ヲ盡シ眞摯以テ事ニ當ルベシ」の文言を示しました。生徒はこの綱領を暗記し、朝礼などで校歌斉唱とともに

朗唱しました。それは終戦まで続きました。大正10年、第九代校長千秋穂三郎は訓育方針の中で、「生徒心得綱領ハ至誠己ヲ尽シ眞摯事ニ當ルヲ根本精神トナシタルモノニシテ」と述べ、あらためて「生徒心得綱領」の根本精神として「至誠」を位置づけました。

戦後、教育の民主化が進められると、昭和22年、「直クアレ」「高クアレ」「広クアレ」「深クアレ」「雄々シクアレ」の新しい校訓が制定され、民主主義の担い手になる人材の育成が目指されました。その後、昭和58年、国際化の進展に伴い、世界的視野を持つ人間育成を目指し、「誠実」「剛健」「博愛」が新しい校訓となり、さらに平成15年、男女共学化による学校改革に伴い、明治時代より一貫して、本校教育の校是であった「至誠」が校訓となり現在に至っています。

ところで、文化庁より登録有形文化財に指定された講堂に、「至誠」の二字を大書した扁額が掲げられています。この扁額の書は、二宮尊徳の孫にあたる尊親が、北海道から相馬に帰ってきた折、母校相馬中学のために揮毫したものとされています。元東京教育大学名誉教授の鎌田正先生(中28回卒)は馬城会報第20号で、「母校に学んでこの扁額を仰ぐ諸君は、その意味するところに思いを致し、今日の学業と将来の活躍の上に役立ててほしいと切望してやまない」と、当時の生徒にメッセージを送りました。「何事にもまごころを尽くしてあたる」という「至誠」の精神は、時代を超えて、人としてあるべき理想の姿を示しています。

右は二宮尊親の書



福島イノベーションコースト構想に係る教育プログラムが行われています

【地元企業・研究施設見学】

10月7日、2学年を対象に地元企業・研究施設見学が行われました。このプログラムは、地元の企業や研究施設の見学を通して、震災からの復興に取り組む相双地方の実情を知ることによって地域理解を深め、将来の有為な人材を育成することを目的としています。生徒諸君は、①廃炉技術、②ロボット技術、③環境の再生・創造、④産業復興、⑤震災の歴史と雇用の創出の5つのテーマから1つを選び、各テーマごとにバスに分乗して移動しました。テーマ1、2では廃炉やロボットに関する最先端の技術について、テーマ3では特定廃棄物の埋立処分事業等について、テーマ4では原発事故避難指示区域での起業活動や農業復興に取り組む企業について、テーマ5では震災の記憶と石炭灰リサイクルについて、それぞれ学ぶことができました。今回の見学を今後の地域課題研究に生かすとともに、自分の進路決定の参考にして欲しいと思います。



【イノベ講演会】

10月8日、1学年を対象に福島大学共生理工システム学類教授の佐藤理夫先生を講師にお招きし、「再生エネルギーについて」の演題でお話を頂戴しました。再生エネルギーの実用化が求められる背景についてデータにもとづく説明があり、また、県内の再生エネルギーの現状と課題について丁寧な解説をいただきました。社会の変化が激しい現代において、若者には、変化に適応し、課題を解決しながら、状況を変えていく力が求められる」という言葉が心に響きました。生徒諸君には今回の講演を参考に研究テーマを設定し、積極的に課題研究に取り組んでほしいと思います。



【イノベ大学教授による出前講座】

10月29日、1学年を対象に大学教授による出前講座が行われました。生徒諸君は以下の5つの講座に分かれて、講師の先生方の熱心な講義に耳を傾け、メモを取っていました。どの講座も興味深く、学問の楽しさ、面白さを存分に伝える内容でした。知的な好奇心を刺激された生徒の今後の変容が楽しみです。

テーマ	内容	講師	所属
土木工学	ロハス工学	子田康弘先生	日本大学工学部
自然との共生	震災復興・まちづくり	市岡綾子先生	日本大学工学部
工学の基礎	新しい情報処理技術	加瀬澤正先生	日本大学工学部
IoT-Rプロジェクト	水中ロボットの開発	高橋隆行先生	福島大学共生理工システム学類
食農の促進	浜通り産米の「食と農の特性」明確化と地域・食育振興	新田洋司先生	福島大学食農学類

教育実習が終了しました

10月5日から3週間にわたって教育実習が行われました。今年度はコロナ禍のため、6月に予定した実習を10月に変更しました。実習生8名の内訳は、数学1名、英語1名、理科1名、保健体育5名でした。初日、私から教育実習の心構え、これからの教師に求められる資質と能力について講話を行いました。8名全員が相馬高校の卒業生です。実習生の皆さんは、担当の先生方の指導を謙虚に受け止め、意欲的に取り組んでいました。私はすべての研究授業を参観しましたが、初めて教壇に立ち授業するのですから、いろいろな面で未熟な点はありましたが、授業内容を分かりやすく生徒に伝えようとする熱意が感じられました。一方で実習生の授業を見ることは、先生方にとっても日頃の学習指導を振り返るきっかけになったと思います。私からは先生方に、指導方法のさらなる工夫と授業改善をお願いしたところです。実習生の中から一人でも多くの方が教員となり、将来、相双地区の教育を支える存在になってほしいと切に願っています。



同窓生列伝⑱折笠晴秀（1885-1965）続編 折笠と程ヶ谷カントリー倶楽部

同窓生列伝⑦において、折笠の趣味がゴルフであったことはすでに述べましたが、その活動の一端が明らかになりました。折笠は、大正11（1922）年に日本人用として国内で初めて設立された程ヶ谷カントリー倶楽部（横浜市）の会員としてゴルフを楽しんでいました。同倶楽部は著名な政財界人によって設立され、ゴルフ場は18ホールの本格的なものでした。設立メンバーの中心であった井上準之助は、日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任し、森村市左衛門は森村財閥の総帥でした。この二人が資金を集め、倶楽部設立とコース建設に尽力しました。大正14年には朝香宮殿下と李王世子殿下、昭和2年には東久邇宮殿下、昭和3年には久邇宮殿下が名誉会員になっています。以下、同倶楽部の歴史をまとめた『程ヶ谷二十年』をもとに、折笠の活動を見ていきます。

折笠が程ヶ谷で最初にプレーしたのは、昭和2年と推定されます。「競技成績」の頁を見ると、同2年から8年までに実施された様々な大会やトーナメントにおいて、折笠が好成績を収めていた記録が確認できます。また、昭和3年から9年の「ハンディキャップ」の頁にも折笠の名前が確認できました。しかし、昭和10年以降になると、「競技成績」と「ハンディキャップ」のいずれの頁にも、折笠の名前は確認できなくなります。

ところで興味深いのは、相馬家第31代当主の相馬孟胤（たけたね）氏の名前も、「競技成績」や「ハンディキャップ」の頁に出てくることです。最も早い記録は昭和元年です。孟胤氏も数々の大会で好成績を収めています。昭和6年のハンディは孟胤氏が4、折笠が10ですから、シングルプレー

ヤーの孟胤氏はかなりの腕前と言えるでしょう。孟胤氏は大正11年から朝香宮御用掛を勤め、同12年に朝香宮に従いフランスに渡った際、ゴルフと出会い、それがきっかけでゴルフに力を入れるようになりました。その孟胤氏も昭和10年以降、競技に関する記録はなく、「物故会員」欄で昭和11年2月に逝去した記述が確認できます。同年発行の『相馬郷』第30号で折笠は次のように記しています。

故孟胤様には小生特に知遇を辱うしたるに拘はらず、御病氣革りし頃より小生も寝込んでしまつたために、其後御見舞も申上げず葬儀にも伺ひ得ざりしことを実に残念に思つて居ります。

おそらく折笠は、孟胤氏の影響もあって程ヶ谷カントリー倶楽部に入会し、孟胤氏が病氣療養のためゴルフから遠ざかった昭和10年以降、折笠自身も体調を崩し倶楽部会員としての活動はなかったのではないかと推測されます。

折笠と孟胤氏は年齢が四歳しか違わず、東京帝大出身の同窓でした。帝大進学の際は相馬家の育英事業の援助を受けています。二人はゴルフを通じて、藩士の子孫と旧藩主家の当主という関係を超えた絆を育んだのではないかと思います。折笠にとって知遇を受けた孟胤氏の葬儀に出席できなかったことは、やむを得ない理由があったとは言え、痛恨の極みであったに違いありません。なお、折笠の孫の恭子さんは、「祖父は仕事とゴルフに忙しく、（中略）一緒に過ごす時間が少なかったと回想しており、ゴルフに熱中した折笠の一面を伝えています。

相馬郷杯 (St. Helen's Memorial Cup)			
A組 (7月14日、参加14名)			
一位	白石多士良	12	144
二位	折笠孟胤	8	147
B組 (7月15日、参加14名)			
一位	轟山俊蔵	18	146
二位	福井謙吉	15	149
	折笠晴秀	18	149

同じ大会に出場した折笠と孟胤